

# 國學院大學學術情報リポジトリ

社会構成員の複雑化とその表象表現を科学にする言語研究の系譜：

国学から国語学そして日本語学。国語学から方言学そして社会言語学：

特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 和之, Sato, Kazuyuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000432">https://doi.org/10.57529/00000432</a>

# 社会構成員の複雑化とその表象表現を 科学にする言語研究の系譜 国学から国語学そして日本語学。 国語学から方言学そして社会言語学

佐藤和之

## 1. はじめに

人間に内在する意識や感情、年齢、性、生育歴など、さまざまな条件を説明変数にすると言語の構造を把握するのが困難になる。説明変数が複雑に絡み合い言語の本質を見極めにくくするからである。そのため構造言語学では人間の関わりを極力避けて本質に迫ってきた。だから国語学もまた日本語の変化や変容の理由を人間に関連させて説明するのを避け、記述的研究で留めおくのが常だった。しかし言語の変化や変容を追い求めると、どうしても言語の使い手である人間や人間の集合体である社会が内包する要素を変数にして説明する必要がある。人間に起因する要素を避けてきた言語学にとって、それらを説明変数にして解釈する目的は研究にしにくかった。そこで、とくにいま現実の言語生活を営んでいる住民を対象にした現代語研究では方言学という領域に分化させ、言語の変化や変容の原因説明に取り組むこととなった。しかし方言学はネイティブの言語生活を研究するためのものだったから、日本語に生じるすべての変化や変容の要因を扱いきれなかった。そこで、複雑化する社会やさまざまな地域住民による言語変容を扱う研究は社会言語学と呼び、方言学との棲み分けをするようになった。

一方の国語学は日本語学へと呼称を交替し、研究の対象に幅の広がりを見せたが、社会の変化はそれより早く、地域社会は、ノンネイティブを受け入れたように外国人も住民として迎え入れ、地域社会で共生する言語生活を日常にした。外国人住民の子供たちもネイティブとして育ついま、従来の言語研究の枠組みによる手法は現実社会の言語変容を十分に説明しきれぬのが新たな課題となっている。国語学が日本人だけの、方言学がネイティブだけの言語研究としてその手法

を研鑽してきたとして、日本や地域社会に住むいわゆるノンネイティブの関与によって変化する日本語を説明し、さらに国語のあるいは日本語の課題としての言語計画や言語政策への言語学的知見に基づく説明や課題の解決法を示すことができるのか。

与えられた主題は「社会とのつながりの中でのどのような言語研究が将来あるべきなのか」や「現代日本社会における日本語学の状況」についてである。拙稿では国語を説明してきた言語研究の経緯を概括し、ことばの使い手が複雑化する日本社会での日本語の変化を把握して説明する方法に言い及ぶ。そしてそのことを根拠として、上述主題について応えるプラグマティックな言語研究のあり方を論ずる。

## 2. 方言を話す人々と国語

いささか文化論的な書き出しになるが、かつての地域社会はまとまりの良い集団だった。地域へのよそ者の入り込みはほとんどなく、以前からの住民がよそへ移り住むこともほとんどなかったからである。本家と分家のような関係、とは言っても、本家も分家もそれほど違わない生活で、それに見合ったことばを生み出し、受け入れ、語り継いできた。

たとえば青森県で使われていた、あるいは使われているはずのケガズについて、青森県南部地方の方言研究者田中はケガジダッタドモ 昔オネ 死ヌフトア ネガッタナ (凶作だったが、昔のように死人がでるといことはなかったな)を紹介する (『青森県上北地方の方言』)<sup>(1)</sup>。また『日本方言大辞典』には見出し語ケカチがあって、北海道や東北全域、信越、北陸、四国、九州での使用を報告している。

ケガジは果たして方言なのかを考えさせるのだが、国語研究者なら当然、方言だけ漢語起源であると説明するだろう。「飢渴 (中国語簡体字、飢渴)」である。国語史や語誌研究ではさらに、どうやって日本語になったかまでを説明する。いわゆる国語学の伝統的手法であり、地域的な広がりまで語誌に含めたら、方言の研究として扱うこともできる。

同県津軽地方の方言研究者鳴海は『津軽のことば』<sup>(2)</sup>で「「けがじ」の語源は、いうまでもなく、「飢渴」という漢語である。一中略一 国語の音韻の転化の例にならって、「ケカチ」となる。「ケカツ」も同じ。それがさらに訛って、「けがづ・けがず」、そして津軽の「げがじ」となったもの」と説明し、津軽方言での用例や派生語について書き加える。

このように、飢渴由来の音形が上北地方 (南部方言) や津軽地方 (津軽方言) の方言辞典に掲載され、またネット媒体だが下北弁辞典<sup>(3)</sup>にもケガ (ン) ジがあることから、青森県全域で使われていた (いるはずの) 語と考えてよい。読み書

きが普通でなかった時代の青森県で「米が不作」の状況や「米がとれなくて飢えに苦しむ」状態のことばとして音だけで住民に広まった。それがさらに口伝えてケガジやケガズ、キガジ、キガズ、ケガンジ、ケガンズ、、、と、自由な音になって使われてきた。だから住民にとってのこれらは、文字と共に広まるカタカナ外来語と違い、漢語由来であることを気付かせない昔から言われていた方言であり、さらに現代共通語でケカチを使うことはほとんどないこともあって、ケガジを知る上北の住民は、上北だけの独特な言い方と思い込んでしまう。

### 3. 俚言ケガジの成立理由 — 方言学的解釈

時代は変わって、教育が普及し、農業も近代農業を営むようになると、ケガジがなくなったわけではないが、被害を最小限にする農業技術やそれをくい止める教育を住民は学ぶようになる。それが前掲田中の紹介した「ケガジダツタドモ 昔オネ 死ヌフトア ネガッタナ (凶作だったが、昔のように死人がでるということとはなかったな)」である。かつては音で伝えたいいろいろな風習を、文字によって正しい発音と共に技術も学ぶようになった。「冷害で米が実らない」ことや「米がとれなくて飢えに苦しむ」ことは、「凶作 (キョーサク)」や「飢饉 (キキン)」という語に置き換えられ、ケガジは古老からの伝承として聞くだけになった。とうぜんのこととして、ケガジやキカンジが飢渴に遡ることはなく、使い手も聞き手もその地方独特の言い方と思い続けることになった。

やがて毎朝新聞を読むのが普通になり、新聞で使われる飢饉や飢餓を自然に受け入れるが、一方の飢渴を紙面で目にすることはなかった。たとえば平成になってから(1986年以降)の読売新聞<sup>(4)</sup>が使った飢饉は1230件、飢餓は3837件である。「長州藩は飢饉などに備えて大量の米を」(2017年12月2日)や「享保の大飢饉による人口の減少が」(2018年3月26日)のように普通名詞として使われているが、飢渴は「忍者の携帯食の兵糧丸、飢渴丸、水渴丸などを作りました」のような固有名詞に近い使われ方で、同期間の使用例は41件だった。三十数年での掲載件数だから、年間に直すと1年に1件から2件である。読者の目に触れるかどうかということになる。ちなみにその頻度は飢饉の1/30、飢餓の1/94だった。

読売新聞創刊の1874年から追ってみても、もともと飢渴は使われなかったようで、明治から昭和にかけて(1874-1989)の125年間で飢渴の使われた記事はわずか23件だった。一方、同期間の飢饉は2934件、飢餓は1540件だから、ケカズは漢語の飢渴と説明されても説得的ではなかったのだろう。このように、現代になってもケガジが飢渴であることを国語研究者しか知らないのだから、上北のケガジ・ダツタドモや津軽のケガジ・ダガサモシラネエ (凶作かもしれない)(鳴海・1958)は、それぞれ南部の方言、津軽の方言と理解する住民たちの思いになるのはごくごく自然である。俚言の成立理由を方言学ではこのように説明することもできた。

#### 4. 方言辞典と国語辞典

ケガジに限らず俚言の衰退に拍車をかけたもの、それは地方社会での教育の普及と生活様式の変化、そしてその結果としての人口移動の活発化である。社会によってわずかに違う語り継がれた言い伝えは、教育の普及によって普遍的な情報へと昇華した。文字も使って伝える教育は、全国どこでも同じ意味の語を等しく説明できる地域社会を産み出した。地域社会の住民は、安定した収入を目指して高い学歴と日本のどこへ行っても通じる共通語を獲得していく。ケガジに左右されない安定した収入と高い収入を夢みる地方社会の住民は地域外への進学や就職を果たし、また逆に、都市と同じような機能や豊かさを地方に供給する住民を他所から地域内へ迎え入れた。

住民の移動が大きくなれば、それを可能にする高速交通体系が整備される。それら社会機能の充実に合わせて、昔からの住民も共通語を当然のように使い、俚言は懐かしいことば、あるいは知識人の言語学的な説明のためのことばへと変容していった。これが近代地域社会の成立である。そしてそこで使われる近代を獲得した証が共通語だった。この社会現象を国語学や方言学は共通語化という術語で説明した。1970年代のことである。地域社会で使われなくなったことばは方言辞典に記載され、昔の地方のことばとして語られることになった。ケガジは方言辞典に、飢饉は国語辞典に登録された。このことによってケガジは方言になった漢語起源の俚言という立場を得ることになる。

#### 5. 国語学と方言学

概説のようにになるので詳述は控えるが、西洋言語学の手法を借りて国学から独立した国語学は、近世以来のいわゆる国文、国史、古道を解釈するための国語研究から、国語の言語特徴を確立させる文法研究や音韻研究をするようになった。19世紀後半からのヨーロッパ言語学が構造主義を標榜したように、国語学もそれに倣って国語を構成する要素や要素の変化を時代の流れに沿って説明できるようになった。言語とは記号学的な要素の組み合わせ（構造）であり、構造を解明するには人間が関与する情報を排除してこそ言語の普遍に近づけるという考えに基づいた国語研究である。この研究手法はいまも国語学の根幹を担うが、他方、いま見たような、人間の介在によって生じる表現の発生や変化、変容の原因を説明することはしなかった。要素の変化という言い方をしたが、構造言語学は変化の過程を説明しても、変化を生じさせた原因との関係は説明しなかったということである。

国語研究にあって、これらへの人間の関与を説明変数にして解釈したのが方言

学である。方言学になる以前の方言の研究は、かつての国語と国語研究での関係のように、国語学あるいは民俗学への従属的な立場にあった。しかし20世紀末の20年で、方言の研究は国語学から独立し、ことばの使い手である人間から情報を得、同時期の日本語が抱えるさまざまな言語的課題に答え、人々の言語生活を説明できる方言学として成立した。国語研究の社会学化を遂げたのである。

## 6. 方言研究を方言学に推し進めた現象

社会学化とは、地域社会で使われることばの変容—すでに記したように、初期の言語事象でいうと、それは地方社会の共通語化と呼ばれた—その変容過程を説明する社会的変数や、そのために社会学での方法を導入したということである。60年前に遡ると、日本が戦後復興を遂げた昭和30年代は、高度経済成長の20年間に入った時代である。この時期が前述、高学歴化と安価な労働力が金の卵と呼ばれて都市へ大量移動したときで、それが最大要因となって共通語は日本の隅々に広まる。もちろんテレビが果たした役割も大きい<sup>(5)</sup>のだが、共通語を話しても羞恥を伴わない言語生活へと地方社会を導いたのは、ひとえに外来者の転入と移住の多さであった。

冒頭に戻って確認すると、昭和30年代に始まる日本の高度経済成長によって、地方社会の住民たちはケガジに左右されない安定した収入とより高い収入を望むようになる。ある者は生活の豊かさに近づける学歴を求めて、またある者はより自由な職業を求めて生まれ育った地方を離れた。一方で、人々が自由に移動するようになった結果、その後の地方社会には、共通語を使うようになって戻る者や、その土地の方言を話せない家族を連れて帰る者、転勤族と呼ばれる家族皆が別の社会からの住民などが混在し、地方社会であっても地域のことばはいろいろになっていく。そのような人間の移動と混在を可能にしたのが高速交通体系の整備と充実である。やがて生活水準の質的標準化は達成され、どの家にもテレビや冷蔵庫があり、電話があるように、もともとの住民たちが方言だけでなく共通語も使う生活を当然にした。地域社会での共通語の使用は、方言話者（ネイティブ）と異方言話者（ノンネイティブやセミネイティブ）の混在によって可能になったといえる。

方言と共通語の使い分けという言語行動と、住民たちのことばの使い分け意識についての研究がこの頃活発になる。移住者たちが新たに住んだ先の方言への感情やその方言を使ってみせることによる帰属の表明意識など、方言を使うことの価値や効果が新しい研究課題として活発に報告された。そして、そこで使われた調査や分析の方法は、地域社会を言語学的に切り取る方言学の方法論として蓄積された。

## 7. 方言の変容

地域社会の共通語化を方言の衰退と捉える報告が目立ったのもこの頃である。方言研究者によって言われたことは、20世紀中に方言はなくなるであった。伝統的な立場に立つとその頃話されていたことばはかつてのそれとは違った表現になっていた。しかし複雑化する地域社会の構成員たちという視点に立つと、方言は地域社会の複雑化に合わせて変容しただけと考えるのが現実的だった。だから21世紀になり、さらに1/5世紀も過ぎようとするが、依然として弘前のことばは東京のことばと違って、大阪のことばも首里のことばも、それぞれに弘前方言、大阪方言、首里方言として存在している。関西では今もって京都のことばと大阪のことばは違うことが住民の話題になる。いま話されているそれぞれの方言は、50年前、100年前のそれと違っているが、個々の地域社会にとっては、それぞれの社会事情に合わせて変容させて使い勝手を良くした表現にしている現実がある。伝統的な表現が現代の地域社会の生活を言い表すのに適しているわけではないという事情である。

ミクロな視野で家庭内のことば遣いを考えてみる。婚姻圏の広がりにより、他所からの新しい家族を迎えた家庭での家族のことばは伝統的な表現を踏襲できるかである。多世代家族か核家族かといった家族形態によっても違うだろう。子どもはネイティブだが、ノンネイティブのいる家庭で育ったら伝統的な表現をどれくらい受け継げるかでもある。理解率は高くても使用率は低いかもしれない。

共通語も普段遣いになった現代の子供にとって、ケガジはもはや学習することばでなくなった。教科書や辞書、テレビが普通に使う、人が飢えて死ぬや米ができない、少し大きくなって知る大人びた餓死、飢饉、不作、凶作といった言い方を発達に合わせて文字やマスコミから学べば十分である。地域内でさえ使わなくなったケガジは、高齢者の言い方としての理解語彙、あるいは全国共通語での言い換えによる衰退（換言衰退）<sup>(6)</sup>の途をたどった。

他所からの家族を迎えた家庭で考えたこのミクロな視点は大同小異で、それが子供の行く学校だったり、さらに成人してからの社会だったりマクロ化しても、社会が必要としないことばは、それが歴史のある語であっても受け継がれることなく衰退（消失衰退）し、伝統的な生活道具やその呼称は辞書に書かれた全国共通語に言い換えられていった。囲炉裏（伝統方言：シボド）やランプがなければ煤（伝統方言：ヘソビ）は目にしない。家族内の話題にも上らない。生活様式の変化と共になくなり、昔話や絵本に書かれた全国共通語になるのは必然である。

だから人口の多い、そして他地域からの移住者が多い、つまりそれは都市ということだが、そこでの方言の変容は大きい。共通語化と呼ばれるこの現象は、人口移動の小さい地域だからといって生じないわけでない。都市に比べたら小さい

だけで、いずれの地域社会も方言のベクトルは常に変容の方向にある。だから、静的な状態を把握する従来の記述的研究でも、記述を時間軸、あるいは地域軸に沿って積み重ねて解釈する動的な方言研究が求められるようになるのは自然なことだった。

## 8. 国語学から日本語学へ

国学から国語学を、また国語学から方言学を分化させたのは、言語という対象を新たな価値観で分析、説明するため、分化前の領域では使い得なかった方法による価値観を研究の基軸にできたからである。

他方、国語学会が日本語学会に名称を替えたのが典型だが、国語学が日本語学になったのは分化でなく呼称の変更だった。日本語学会もそれが「改称」だったことを報告する<sup>(7)</sup>。研究の方法論は変わらないにも関わらず呼称を替えた理由は何だったのか。社会にとって必要な事物、事象へは呼称が付与されるという視点で考えてみる。

まず2018年において国語（学）研究室（教室）を掲げる大学は一般的か調べたところ、国語（学）を使っている研究室（教室）は教育学部系を除くと少数で、多くは日本語（学）へ名称を替えていた。国語（学）を冠した学科や研究室（教室）であっても、研究室（教室）の紹介や開講科目には「日本語」や「日本語の研究」といった表現を使っている例もあった。大学の現状は、教員職員（教職）免許に関わる科目や教員養成系の大学、学部で使われる以外は日本語（学）が主流になっていた。国語は小・中・高での論理的思考力や情緒力を育てるための教科<sup>(8)</sup>であって、大学で探求する国語学とは違った領域として存在している。学校教育の国語を日本語に置き換えられない事情があった。

そこで学校教育での国語と分けて、国語学から日本語学へ名称変更した理由を考えると、国語という術語には「日本人だけの」や「日本人による」といった暗黙の了解が備わっていて、いわゆる閉ざされた国民の術語だったことに気付く。たとえば研究で扱う対象言語を説明しようとして、国語を対象にしていることを外国語で伝えるとき、national languageやlangue nationaleと表現したのでは通じない。あるいはまた「中国で国語辞典を買いました」や「中国の国語辞典を買いました」での国語辞典は、それが中国語辞典なのか中国で日本語教育をするために買った日本語辞典なのか曖昧である。そのためには、国やnational (e)の曖昧性を消して、対象言語となる日本（語）やJapanese (japonais)を具体的に表現する必要がある。このようにして、研究で扱う対象は日本語であることを具体的に表現する必要から言い換えが広まったと説明するのがよさそうである。

ちなみに日本語学会（旧国語学会）は、改称理由について「『国語学』という国際的に通用しにくい名称」を不適当と考える意見のあったことや「『国語学』

という名称がかつて有していた包括性が失われてきている」こと、また「日本語研究の細分化を克服するため」といった理由で説明する(抜粋)<sup>(7)</sup>。

それでも国語と代替語としての日本語が内包する同義性について課題は残る。国語教育と日本語教育は別であるように、言語研究者の「日本語を研究しています」や「日本語研究者です」は、一瞬、日本人でない研究者の発言、あるいは言語研究としての扱いが何かわずかに特別な試みをしているかのような印象を含むからである。

このように、必ずしも日本語が国語と100%一致しているわけではないが、しかし国学以来の歴史から、国語の研究というと、閉ざされた専門領域のようなイメージがあるため、自由度の高い日本語の研究を求める研究者たちにとって、国語学という学問の枠内で創造する研究の内容や手法が間尺に合わなくなってしまったというのが率直な事情であろう。制限しているわけではないのだが、どこか研究を拘束しているような閉塞感である。それが呼称を交替させることで、日本語の研究は外国語との対照研究や比較研究、また日本人研究者だけでなく外国人研究者にも開放された印象となり、かつてより言語の研究として自由度の高い研究成果を生みだすのに成功したことから、名称の変更は研究の幅の広がりを示したと考えるべきであろう。

## 9. 方言学と社会言語学

国語学から日本語学への呼称交替は、従前の国語研究が扱う研究対象の広がりを示すためだったが、それでも方言学が日本語学に包括されることはなく、逆に、上述した国語と日本語の意味的なずれが、方言を扱う研究にとっていささか距離をとってしまった感がある。つまりこういうことである。

時代の推移に伴う言語変容や新たな言語事象を説明するために、それを調査し解釈できる方法論が求められた。社会構成員が複雑化し、社会的属性の違いが言語の変容に大きく影響する現代社会を読み解くには、社会的要因を説明変数にした言語研究が必要で、一時期その役割を方言学が担った。しかしもともとの方言学は、その土地で生まれ育った生粋話者(ネイティブ)、しかも伝統的方言を温存する比較的高齢な話者のことばを対象にしている、ネイティブの語形や文法、音声、音韻といった言語特徴を記述的に研究したり、地理学的な異同を研究したりするのが専らであった。

一方で言語研究者たちの知的好奇心の多様化とそれに伴う方言学の成熟は地域社会への移住者(ノンネイティブ)のことばも対象とするようになった。新たな土地での移住者たちの言語意識や言語行動、移り住んだ先の方言習得、またあるいはその地域の方言や住民の言語意識へのノンネイティブからの影響といったことを、それまで言語研究が扱わなかった社会的要因との関係から解明したいと考

えるようになったのである。つまり、ことばの変化を生じさせる原因はことばの使用手こそが内在していると考え、方言研究者は社会的要因を使ってそれを科学的に説明しようとした。

社会的要因を使った科学的説明とは、被調査者（インフォーマント）の社会的属性やことばの背景にある社会への意識、感情、要求、態度といった変数への心理的強弱によって言語変容を説明することであり、サンプリングによって選ばれた被調査者を質問紙によって大量調査し、その結果を統計学的に分析する。そのことから社会の考えや言語の動態を把握しようとしたのである。

社会的な説明変数に重きをおく手法は魅力的だったが、次第に方言学が求めてきた研究目的から離れつつあった。方言学は、地域間の言語差から文化の移動経路や日本語の歴史などの説明を得意としてきたのであり、社会学化する言語研究、すなわち属性の違いによる日本語の研究も方言研究として扱えるのか曖昧になったという事情である。ここに至って、社会学化する方言研究を社会言語学として独立させ、方言学は日本語研究のうちでもとくに日本語の地域差や方言特徴を取り扱う分野として棲み分けるようになった。1990年代のことである。

日本の社会言語学的研究の萌芽は1980年代にはあったのだが、その頃は方言を研究対象とするより、特定の言語、たとえば日本語を社会的要因から説明したり、日本語と外国語のバイリンガル研究だったり、地域語と地域語の相違というより、国家語と国家語の接触あるいは影響の研究が目立った。多言語国家での言語接触研究がSocio Linguisticsとしてなされていた方法論を日本に取り入れたからで、そこでの考え方を方言と方言間の、あるいは方言と共通語間の接触に応用したのが日本の社会言語学研究の初期だった。社会言語学、あるいは言語社会学と名称も揺れていた時代である。

## 10. 日本語研究への社会言語学適応

社会言語学という研究の枠組みを日本語研究に適応させたことで、方言学あるいは日本語学や国語学との違いを明確にする研究特徴が生じた。日本の言語学は、社会が求める言語的な課題解決への糸口を示す研究をするようになったということである。解決の糸口を示す研究は、人文系の研究に共通して求められる能力だが、その中であって、社会適応という研究能力を言語研究は社会言語学によって実現しようとした。なぜ国語学や日本語学、方言学はプラグマティックな研究による社会への適応をしてこなかったのか。正確に言うと、まったくなされなかったわけではない。先に、方言学にはその萌芽のあったことを記したが、社会言語学になって社会適応型の言語研究を正しい課題として研究できるようになったということである。

再び近世から近代の頃に戻る。国語の研究は古典研究だったり近代国家での意

志統一のための、また国民を作る学校で教育するための国語制定だったりして、もともとがそういう目的を達成するためのものだった。だからプラグマティックであることをその任としていたといえる。一方近代言語学への倣いによって取り入れた手法は、言語の普遍規則を知るためのもので、そのことが直接に当時の社会の何かに役立つことを目的にしたものではなかった。さらに言うなら近代以降の人文研究は、性急に結論を求める研究であってはならないとの考えに基づいてもいた。

利便性を求めない研究は成果にとらわれないため、根元的な事象を着実に追求できる。だからその成果は、多くの可能性を秘めた重厚なものになるという理屈である。それに対して課題解決型の研究は、実績や成果を追求しがちなため研究に深みや幅がなく、浮薄な成果を結論にしてしまう。だから研究というものは物質的利便性を求めたり、社会的有益性を目標に掲げるようなものであってはならない、との考えである。人文学がプラグマティックな課題を研究しにくい理由がここにあった。

根元的な考察や基礎的な解明を重要視する研究が大切なことは言うまでもない。他方で言語の使い手や使い手の属性が複雑になった社会で使われる表現や言語の変容に関わる事象は、記述あるいは構造の分析では説明しきれなくなった。社会の変容やことばの使い手の成長、交替によって錯綜する言語事象を客観的に調査し、整理、分析する。そして社会が求める課題解決を、根拠に基づいて説明できる研究法が必要だった。一時期その役割を方言学が担ったが、ことばの使い手たちの複雑化によって方言を対象とした研究だけでは解決できなくなった。この事情についてはすでに「9. 方言学と社会言語学」のところで記した。そこでの方法論的な窮屈さを課題にして解明できる研究領域が求められた。それが既述、1990年代の社会言語学研究の芽生えにつながる。

この萌芽は、言語研究にありながらそういう課題も正しく扱おうとした社会言語学研究会（後の社会言語科学会）の設立にあった。現実社会に生じる言語上の困惑や混乱の解決を目的として、根拠に基づいた結果から答えを導き出そうとする言語研究である。社会が求める課題の解決に役立つ研究であることを徴表するためにウェルフェアという術語を用意した。ウェルフェアについての詳細は省略するが<sup>(9)</sup>、徳川<sup>(10)</sup>によって提唱されたウェルフェア・リングイスティクスが、言語上の問題で社会が困っていることや、困っている人、また言語の何に困っているのかといった課題の整理に始まり、それらの解決法や少なくとも解決の糸口を課題解決型の研究によって成立させようとした。プラグマティックな課題解決型の言語研究であることを特徴とし、研究の目的にそれを含んだ研究領域が成立した。

## 11. 日本語をプラグマティックに研究する意義

方言学と社会言語学のところで「多言語国家での言語接触研究が Socio Linguistics としてなされていた方法論を日本に取り入れた」と記したが、Linguistic Society of America では Socio linguistics の特徴を次のように説明する<sup>(11)</sup>。

言語と社会の関係を調査する研究者たちは、自分たちの研究成果が社会的、教育的、あるいは政治的課題に適用されることに興味があって、それらが社会言語学の研究テーマとして扱われるようになることへの期待も高まっている。社会言語学は言語の理論や記述といった社会言語学ならではの研究成果によって、社会が抱える課題へのそれら適応を提言する（意識）。

社会言語科学会も Linguistic Society of America も似たような価値を研究特徴とする。研究課題というと「研究者の知りたいことを明らかにする」という知的好奇心の満足を専らの目的にしがちである。しかし言語研究にあってもプラグマティックな研究が求められる現代社会である。より円滑で理想的な言語生活のための成果が求められる場合もあることを自覚し、社会が困っていることや社会から期待されていることを分析的に確かめながら進める研究姿勢は、得られた成果を社会に信用され、活用してもらううえで必須である。プラグマティックな研究でさらに重要なのは、提案した成果への肯定的評価と否定的評価を知る術を用意し、否定的評価に対しては、研究の改善へつながる価値ある意見と考え、その術をも研究計画に組み入れておく姿勢である。

プラグマティックな研究を展開しようとするとき、研究者の視点だけでなく、その研究成果を活用する立場からの姿勢も必要となる。そのためには、活用者がその成果に納得し、活用を研究者に代わって周囲へ説明できることを考慮した、いわゆる科学的根拠に基づく結果を地域事情に適応させた表現にして示さねばならない。社会にとっての言語的有益性（benefit）を根拠に基づいて示す研究結果は、これまでの言語研究の先にある。このときの研究課題には、そのことが「社会の求めのどれに應えるのか」や、そのことによって「どういう成果が期待されるのか」、「これからの住民の言語生活に有益と判断する理由は説明されているのか」、さらにこれまでの研究成果は「社会からどう評価されているのか」といったことを根拠と共に明示されなければならない。

社会の複雑化に添って言語研究も複雑になる。言語は人間が使うものであり、人間が集まって社会を構成しているからである。だから言語研究も社会の変容や求めに応じた研究へと変わっていかなければならない。拙稿に与えられた課題「多

様化する日本語研究」の理由がここにある。言語研究が社会学化する過程を追った。

注

- (1) 田中 茂 (2013)『青森県上北地方の方言』(青森県文芸協会)
- (2) 鳴海助一 (1958)『津軽のことば』第 4 卷 (みなみ新報社)
- (3) 下北弁辞典 <http://simokitaben.web.fc2.com/index.html> (2018年8月閲覧)
- (4) 読売新聞社ヨミダス歴史館 <http://www.yomiuri.co.jp/database/rekishikan/> (2018年8月閲覧)
- (5) 佐藤和之 (1998)「方言主流社会の東京語」『月刊言語—「東京語論」誰が「東京語」を作ったか』316号 (大修館書店)
- (6) 佐藤和之 (1987)「上山市橋下地区の1家族4世代に見る方言語彙の崩壊と残存」『山形県村山方言語彙の崩壊と残存』(弘前大学人文学部国語学研究室・山形女子短期大学国文科)
- (7) 国語学会代表理事 (2002)「学会の名称問題について (中間報告)」『国語学』53巻4号 (国語学会)
- (8) 文部科学省「国語力を身に付けるための国語教育の在り方」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/007.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/007.htm) (2018年8月閲覧)
- (9) 佐藤和之 (2018)「「社会」を識別指標にする言語学—「やさしい日本語」と鶴岡調査のウェルフェアを考える—」『社会言語科学の源流を追う』(社会言語科学会)
- (10) 徳川宗賢 (1999)「ウェルフェア・リングイスティクスの出発」『社会言語科学』第2巻1号 (社会言語科学会)
- (11) Walt Wolfram, Sociolinguistics, Linguistic Society of America  
specialists who examine the role of language and society have become more and more interested in applying the results of their studies to the broadly based social, educational, and political problems that probably gave rise to their emergence as sociolinguistic themes to begin with. Sociolinguistics thus offers a unique opportunity to bring together theory, description, and application in the study of language.  
<https://www.linguisticsociety.org/resource/sociolinguistics> (Cited: 2018, Aug)